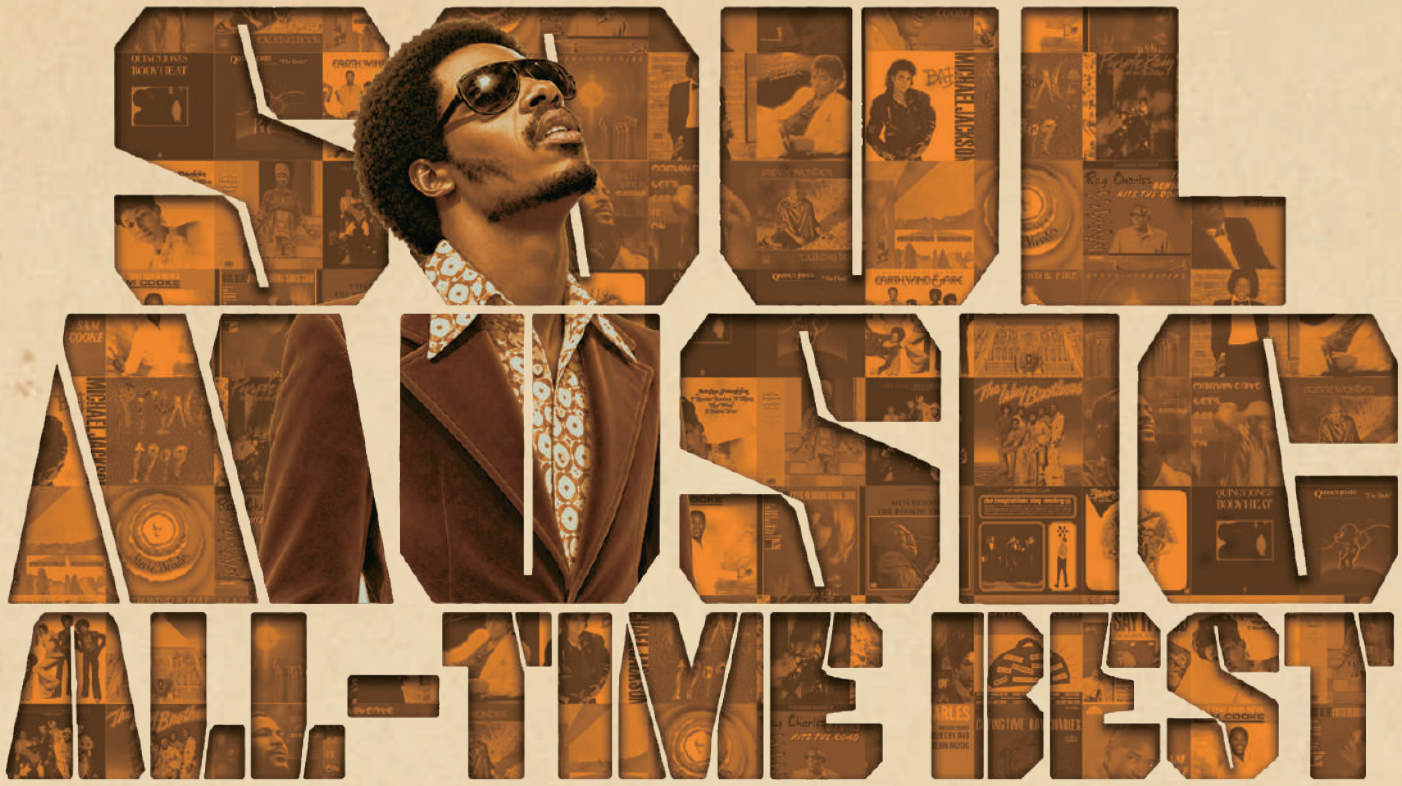


ソウル・サーチャー **吉岡正晴 リコメンド**

【ソウル・ミュージック・オールタイム・ベスト】

吉岡正晴《ソウル & ディスコサーチャー》
音楽ジャーナリスト、DJ、ブラック・ミュージック・カルチャー、ダンス・ミュージック全般に詳しい。
雑誌・新聞・インターネットなどへの寄稿の他ラジオ、テレビ出演。1975 年以来執筆したブラック、ソウル、R&B 系ライナーノーツは 1,500 枚を超える。

MARVIN GAYE
マーヴィン・ゲイ



What's Going On
(1971)

マーヴィンはそれまで、所属レコード会社モータウンに指示されていたものを録音していたが、この頃から自身で世の中を見て感じたことなどを楽曲にしたいと熱望し始め、制作された作品。自身のキャリアにおける、またアメリカ音楽史に燦然と輝く金字塔。グラミー殿堂入り。

MARVIN GAYE
マーヴィン・ゲイ



Let's Get It On
(1973)

マーヴィンはその時その時に感じたことを歌にするようになった。そんな時、長年連れ添った妻(マーヴィンの 17 歳年上)から新しい恋人ジャン(同じく 17 歳年下)への思慕を熱烈に歌う作品を制作することに…。結局、マーヴィンは離婚しジャンと結婚。グラミー殿堂入り。

STEVIE WONDER
スティーヴィー・ワンダー



Talking Book
(1972)

スティーヴィーが 1971 年 5 月にモータウンとの契約を更新し、それまでの会社が用意した楽曲だけでなく、自身で作詞作曲、アレンジなどもした曲を録音出来るようになった作品アルバムの 2 作目。これ以降、傑作が続く。本作から「迷信 (Superstition)」が大ヒット。グラミー殿堂入り。

STEVIE WONDER
スティーヴィー・ワンダー



Innervisions
(1973)

『トーキング・ブック』からの 3 部作と言われる第 2 章。スピリチュアルで内省的な作品や社会へのメッセージも含むスケールの大きな一作。71 年以降、シンセサイザーの匠マルコム・セシルとロバート・マーグレフらの力を借りて録音。グラミー・アルバム賞獲得。グラミー殿堂入り。

STEVIE WONDER
スティーヴィー・ワンダー



Fulfillingness' First Finale
(1974)

3 部作最終章。グラミー・アルバム賞 2 作連続獲得。どの楽曲も非常に密度が濃く、曲の連続性などもあり、アルバムとしての完成度が圧倒的。完全にそれまでのソウル・ミュージックの概念を破った傑作。社会的メッセージよりもよりパーソナルな作品に重心がある。

STEVIE WONDER
スティーヴィー・ワンダー



Songs In The Key Of Life
(1976)

前作から 2 年。その間、私生活では第一子が生まれ充実しつつ、新機材なども取り入れ、クリエイティヴなアイデアが泉の如く沸き上がる。曲が出来過ぎ LP2 枚で収まらず、プラス EP (4 曲入り) に膨れ上がった。グラミー・アルバム賞 3 作連続受賞。最高傑作とされる。グラミー殿堂入り。

RAY CHARLES
レイ・チャールズ



Genius Hits The Road
(1960)

すでにアメリカの音楽シーンではその名を轟かせていた盲目の天才、レイ・チャールズのちょっとしたコンセプト・アルバム。レイが全米各都市を回っていくというもの。ここから生まれ故郷を歌った「わが心のジョージア (Georgia on My Mind)」はシングル単体でグラミー殿堂入り。

RAY CHARLES
レイ・チャールズ



Modern Sounds In Country And Western Music
(1962)

南部に生まれ育ったレイは、ゴスペル、ブルーズ、R&B、ソウルの他に、白人音楽の象徴であったカントリー&ウエスタン・ミュージック (C&W) にも親しみ、自身でも歌い出すように。人種の壁を打ち破り C&W にフォーカスした作品は広く受け入れられ大ヒット。グラミー殿堂入り。

RAY CHARLES
レイ・チャールズ



Crying Time
(1966)

C&W 大ヒットの流れを汲み、カントリーを基調とした作品を集める一方、当時新進気鋭のソングライターで、後に売れっ子になるアシュフォード&シンプソンの「レッツ・ゴー・ゲット・ストーン」なども取り上げヒットさせた。レイはいつでもこうした若手の作品を取り上げるのが上手。

SAM COOKE
サム・クック



Sam Cooke
(1958)

レイ・チャールズより 1 歳年下 (1931 年生まれ) で、一足先に“ キング・オブ・ソウル” などと呼ばれたソウル・シンガーの初期大スターの一人。元々ゴスペル歌手として絶大な人気を誇っていたが、リアルな感情や日常を歌う R&B に転向してからもさらに大ヒットを飛ばした一作。

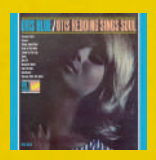
SAM COOKE
サム・クック



Ain't That Good News
(1964)

ゴスペルの影響も残しながら、ポップな世俗音楽である R&B へアプローチ。サムはルックスがとても良かったこともあり、いわゆる当時としては日本でいう“ 若手アイドル” 的な人気を獲得した。一方、社会的なメッセージも歌に込め、その歌唱法は後世に多大な影響を残した。

OTIS REDDING
オーティス・レディング



Otis Blue / Otis Redding Sings Soul
(1965)

メンフィスの名門ソウル・レーベル、スタックスから登場した超弩級のソウル・シンガー、オーティス・レディングの 3 作目。サム・クックの影響を多大に受け サム・フォロワー” としても知られるが、サムよりさらに熱くエネルギッシュなパフォーマンスで人気を獲得。グラミー殿堂入り。

OTIS REDDING

オーティス・レディング



The Dock Of The Bay
(1968)

1967 年 12 月 10 日不慮の飛行機事故で他界したオーティスが、その直前まで録音していた表題曲を、死後、盟友であり同曲でギターを弾いていたスティーヴ・クロッパーが完成させたもの。オーティスはその前に喉の手術をしており、人生観に大きな変化を迎え、大ヒット。

THE TEMPTATIONS

ザ・テンプテーションズ



The Temptations Sing Smokey
(1965)

モータウンきっての R&B ヴォーカル・グループ、テンプテーションズの 2 作目。同じモータウンの天才ソングライターであり、敏腕プロデューサーでもあったスモーキー・ロビンソンの楽曲ばかりを歌ったもの（共作もあり）。スモーキーとテンプスの組み合わせはどれも完璧。

THE TEMPTATIONS

ザ・テンプテーションズ



All Directions
(1972)

テンプテーションズが音楽的方向性をいわゆる“ サイケデリック・ソウル／ファンク” 路線に変えてからの大ヒット。この路線を推し進めたプロデューサー、ノーマン・ホイットフィールドがしばらく彼らを手掛け次々とヒット。「パパはローリン・ストーン（Papa Was a Rollin’ Stone）」はグラミー賞 3 部門獲得。

QUINCY JONES

クインシー・ジョーンズ



Body Heat
(1974)

元々ジャズのトランペッターからアレンジャー、ポップなプロデューサーに進化していったクインシーが、ジャズをベースにソウルとのフュージョン作品を手がけるようになって制作した一枚。これまでのジャズの概念を一歩洗練された雰囲気にして、独自の方向性を編み出した。

QUINCY JONES

クインシー・ジョーンズ



The Dud
(1981)

ジャズ／フュージョン系のクインシーが、前作『スタッフ・ライク・ザット』（1978）の頃から模索していたソウル／ R&B 寄りのアプローチをより一層見せるようになった傑作。すでにプロデューサーとしてマイケル・ジャクソンを手がけていたことも大きい。グラミー賞 3 部門受賞。

EARTH WIND AND FIRE

アース・ウィンド・アンド・ファイアー



That’s The Way Of The World
(1975)

シカゴ出身の元ジャズ・ドラマーだったモーリス・ホワイトがロック、ジャズ、ソウル、ファンク、ラテンなど、あらゆるジャンルを統合した大型グループの通算6作目。当時の黒人音楽と異なり、人生へのポジティブな社会的メッセージも含め傑作に。グラミー殿堂入り。

EARTH WIND AND FIRE

アース・ウィンド・アンド・ファイアー



All ‘N All
(1977)

『太陽神』という邦題を授かったこれも傑作。リーダー、モーリスがエジプトに興味を持ち、スピリチュアルである一方、わかりやすいダンサブルな作品にも仕上げた。伝説のイラストレーター長岡秀星の秀逸なジャケットとともに日本でも大ヒット。グラミー賞 2 部門受賞。

EARTH WIND AND FIRE

アース・ウィンド・アンド・ファイアー



I Am
(1979)

邦題『黙示録』は『ベスト』（1978）を挟んでの続編。一般的にはディスコにアプローチしたとも言われるが、制作陣にデイヴィッド・フォスターらを起用し、グループとしては大きな転換点となった一作。「ブギー・ワンダーランド」が世界的に大ヒット。日本での人気を決定付けた。

MICHAEL JACKSON

マイケル・ジャクソン



Off The Wall
(1979)

マイケルがエピックに移籍しての初ソロ作品。クインシー色の強いポップなソウル、R&B で、この時点でマイケルのクインシーとの最高のアルバムに仕上がったが、グラミーからはほぼ無視され、それがきっかけで、マイケルは次作制作の大きなモチベーションを得た。グラミー殿堂入り。

MICHAEL JACKSON

マイケル・ジャクソン



Thriller
(1982)

これまでのソウル、R&B だけでなく、ポップ、ロックの分野でもジャンルを横断した音楽を作り、全世界的な成功を狙ったマイケルの超意欲作。目で見る音楽 MTV で放送されたショートフィルムや様々な出来事があり、世界で最も売れたアルバムになった。グラミー殿堂入り。

MICHAEL JACKSON

マイケル・ジャクソン



Bad
(1987)

マイケル色が全面に出た、クインシーとの 3部作最終章。音響的には、80 年代中期から出てきた最先端のデジタル打ち込みサウンドを取り込みつつ、マイケル自身のメッセージ色も出し、さらに、ほぼ全曲マイケル自身が書いた作品で仕上げた。これを機に彼は完全に独り立ち。

PRINCE

プリンス



1999
(1982)

デビュー作からほぼすべての楽器を一人で演奏し、マルチな才能を見せていたプリンスの 5 作目。次から次へと曲が生み出され、クリエイティヴな泉が沸き上がって来る時期の作品で、LP1 枚に収まりきらず 2 枚組に。様々なところから音楽的アイデアを吸収した傑作。

PRINCE

プリンス



Purple Rain
(1984)

同タイトル映画は、ミュージシャンとしての自身の伝記物語。事実上のサウンドトラックにもなっているが、音楽的なポップ性が著しく高い楽曲が集められている。周囲から絶対にヒット作を作らなければならないというプレッシャーのなか、見事に応えた傑作。グラミー殿堂入り。

PRINCE

プリンス



Sign “O” Times
(1987)

『パープル・レイン』とはまったく違った方向性でプリンス自身の音楽性の幅広さを大きく見せた傑作。自身のグループ、レヴォリューション解散後初のアルバムで、様々なレコーディングや試行錯誤、実験ののち 2 枚組に落ち着いた一作。グラミー殿堂入り。

JAMES BROWN

ジェームス・ブラウン



Papa's Got A Brand New Bag
(1965)

60 年代当時のダンスの潮流、ゴー・ゴー・ダンスなどの時流に乗る形で、自身のスタイルを作りつつあったミスター・ブラウンの傑作。彼自身激しく踊りながら歌うので、ステージ・パフォーマンス／ライヴで圧倒的な人気を得ていた。シャウトする歌唱はこの頃から魅力的。

JAMES BROWN

ジェームス・ブラウン



Say It Loud I'm Black And I'm Proud
(1969)

アフリカン・アメリカンであるジェームス・ブラウンが、当時大きなうねりとなっていた人種差別問題、公民権運動などの動きに敏感に反応して生み出した表題曲。シングル単体では、グラミー殿堂入り。以後も単なるダンス曲にとどまらず、自身の主張を声高に語るようになった。

ARETHA FRANKLIN

アレサ・フランクリン



I Never Loved A Man The Way I Love You
(1967)

名実ともに “クイーン・オブ・ソウル” になっていく第一歩作品。それまでコロンビアでジャジーな曲などを歌い、音楽的方向性に迷いが見られたが、アトランティックに移籍した本作から、当時流行りの R&B サウンドで一挙に全米の支持を集めた。「リスペクト」大ヒット。グラミー殿堂入り。

ARETHA FRANKLIN

アレサ・フランクリン



Amazing Grace
(1972)

アリーサが R&B シンガーとして確固たる地位を築き、自身のルーツ、ゴスペルを歌いたいと考えて作った 2 枚組意欲作。彼女の人気も相まって、ゴスペル作品としては未曽有の大ヒットに。グラミー賞獲得。後にこのライヴ録音の模様が映画でも公開された。グラミー殿堂入り。

ISLEY BROTHERS

アイズレー・ブラザーズ



3+3
(1973)

ソウルとロックを初期段階から融合していた R&B グループの長い歴史のなかで、1970 年代黄金期の一枚。兄弟 3 人の歌と、兄弟、いとこの 3 人の楽器という 6 人ですべての音を奏でるコンセプトで、バラードからファンクまでをリードのロナルドの声で聴かせ一世を風靡。

ISLEY BROTHERS

アイズレー・ブラザーズ



Harvest For The World
(1976)

アイズレーズはこの時期、どれも傑作ばかりだが、特にこの作品は社会的メッセージ、メロディー、サウンドなど完成度、密度ともに良く出来ている。とりわけ、バラードでのロナルド・アイズレーの魅力が大きくフィーチャーされ、のちにソロ作品や客演などにも繋がっていく。